Sr.アグネス・エレナ廣田

Gail DeGeorgeの記事より抜粋

シスター・アグネス・エレナ廣田和子

原爆が投下されたとき、彼女は5歳で、友人たちと外で遊んでいた。

家が割れて、突然、家の下敷きになったのを覚えている。

「もしそこでじっとしていたら、みんな死んでいたかもしれません。でも、少し薄暗い光が見えたので、歩きました」とシスター廣田は言う。

シスター廣田は、光に向かって、遊び仲間を近くの川まで連れて行った。母親が探しに来て、川のそばで彼女を見つけ、父親とも再会した。シスター廣田は、仲間たちがどうなったか分からなかった。後に、彼女だけが生き残ったことを知ることになる。

「川にいたら、油っぽい雨、黒い雨が降ってきたんです」とシスター廣田は言った。黒い雨は、広島上空にきのこ雲が発生してから約30分間降り続き、原爆の放射性粒子を含んだすすやほこりを含んでいた。

シスター廣田とお父さん、お母さんは近くの木の下に避難した。母は瓦礫の落下で大けがを負い、兄が仲間を連れて母を担架に乗せて運んでくれた。彼女はとても小さかったので、他の人が運んだのだと廣田は言う。

兄を待っている間も、人々は水を求めてどんどん川に入っていった。溺れる人、大怪我を

する人、ショックで死んでしまう人など、川に入っていった人の多くが亡くなった。

「それは、私がいつも心に抱いていることです。私の友人たちはみんな死んでしまった。神様は、私に違う生き方を求めておられるに違いない。」「それは、常に私の問いかけでもあります。私の使命は何なのか。私が成し遂げなければならないことは何なのか。」

8月8日、「母を亡くしました。母が私を呼び寄せ、最後のメッセージとして『強く生きろ』と言った。」 その翌日には、父親が亡くなった。

「父が水をくれというので持っていくと、その水を飲んで亡くなりました」。

兄と姉は、両親の最期の瞬間に立ち会うことができなかったという。

「幼い頃、死を目の当たりにして、死ぬということがどういうことなのか理解できました」とシスター廣田は言う。「私は死があまり怖くありません。とても静かで、厳かな気持ちになります。」

両親のいないシスター廣田にとって、生活は大変なものだった。一番上の兄は20歳で、彼女と妹の面倒を見ていた。兄は、廣田と妹を公立ではなく、カトリックの学校に通わせ、より良い教育を受けさせた。

「私はそれを天職だと思って、修道女になったんです。」

兄には4人の子供がいたので、学費を払うのは容易でなかっただろうと彼女は言う。

「今までずっと、神様に守られてきました」と彼女は言った。

彼女は震源地から半マイル以内のところにいたが、その影響で入院したことがないことに感謝しているという。76歳の今も、「立ち上がって幼稚園で教えることができることに感謝しています。」

シスター―廣田は、教師としての仕事を通じて、園児たちに平和のメッセージを伝えるよう求められていると感じてきたという。

「正義があるところに平和がある」とシスター廣田は幼稚園の園児たちに語りかける。

「子どもたちの喧嘩は小さな戦争なんだよ、幼いうちから平和を学ぶ必要があるんだよ、と言っています。」

「私たちは平和を育むことができるのです。平和こそ、世代を超えて受け継ぐべきものなのです」と。